

南北戦争とチェスナット夫人日記

——新しい南部女性の登場——

谷 中 寿 子

(1) はじめに

南北戦争は、アメリカがそれまでに経験した戦争の中で、アメリカ女性が最も重要な役割を果たした事件である。南北戦争以前の多くのアメリカ女性は、常に夫の陰で、黙々と勤勉に働く妻だった。狭い生活範囲内で、家庭外に目を向ける事もなく、一人の独立した人間としての自覚も乏しかった。正規の教育を受けたり、さらに職業婦人になる女性は稀だった。この様な地位にいたアメリカ女性が、国を二分する大戦争に巻き込まれて、急激な環境の変化に伴い、自分自身を、夫を、さらに、政治を、社会を、見直し

始めたのである。

特に南部女性は、この戦争を痛切に自分達の戦争と感じた。北部女性に比べて、彼女らは、敵の兵士が自分達の家の戸口までやって来て、家財道具、食料を奪って行ったり、家を焼いたり、また、使用人であった奴隷が謀叛を起こしたりして、戦争の恐ろしさ、苦しみを味わった。ルイジアナ州ヴィックスバーグ等の大戦場近くの南部人は、疎開を余儀なくされた。夫や息子を送り出し、農園を守って経営してゆくのも、多くの南部女性にとって初めての経験だった。

この様な状況に置かれて、南部人を含めて多くのアメリカ女性はペンをとった。「南北戦争ほど、アメリカ女性

が、彼女らの経験を書き残し、かつ、それらを出版した出来事はない。」と、言い切る南北戦争史家もいる。彼女達は、戦争中に、日記や手紙に彼女達の考えや経験を書き綴った。また、戦後に、回想録としてまとめた女性も多い。それらは初めから出版を意図したものもあつたが、多くは苦しみの中で、単に書く事で自分を励ますごく個人的な記録だった。今でも家柄の古い南部人家庭で、屋根裏部屋を整理したら、祖母や曾祖母の日記が発見されたと言つて、その研究価値を大学に尋ねに来る人は多い。

南部女性の残した数多い記録の中で、メアリー・ボイキン・チェスナット夫人の『デキシーからの日記』が、最も有名で、南北戦争を扱った歴史書の中で、彼女の日記はしばしば引用されている。この小論は、このチェスナット夫人の日記を分析して、ある一人の南部上流階級婦人の戦争中の行動と思考を探ろうとするものである。彼女が戦争をいかに受けとめ、意義づけをしたか、どんな生活を送ったか等の質問に答えてゆけば、一人の南部女性が戦争をきっかけにして、広く社会に目を向けて、時には夫とは異なる自分自身の考えを持ち、それを公言しながら、自分を含めた南部人を見つめ直して、一人の独立した人間としての自覚を持って生きてゆく姿が浮きぼりにされるであろう。南部上流階級のインテリ女性を対象としているので、一般化は

出来ないにしても、アメリカ史の中で、まだ明らかにされていない女性史のほんのわずかな時期にスポットを当ててみようというのがこのペーパーの試みである。チェスナット夫人はいわゆる華々しく戦った女性解放運動の担い手ではなく、ごくありふれた上流社会の一人婦人であるが、彼女の研究は、アメリカ女性史に与えた南北戦争の影響の理解にも役立つであろう。

(2) 大農園の娘・南北戦争日記

メアリー・ボイキン・ミラー、すなわち、後のチェスナット夫人は、一八二三年、サウス・カロライナ州カムデンの近くのプレザント・ヒルで生まれた。彼女の父親は、サウス・カロライナ大学で法律を修め、同州で上院議員(一八一七―一八一九)、州知事(一八二八―一八三〇)、下院議員(一八三一―一八三三)と、小農園主の階級から彼一代で、州の有力者にのし上った努力家だった。アンチ・ベラム期のごく普通の南部女性は、政治、社会への関心は薄く、人前で政治について自分の意見を述べたり、男性に交つて討論する事は、女性のすべき事ではないとされていた。しかし、メアリーは、政治家の父親の影響でこの時代の女性としてはめずらしく、かなり小さい時から、くすぶ

っていた南北の対立に敏感だった様である。事実、彼女が九歳の時、下院議員時代の父親が書いた関税についてのスピーチを読みたいとの手紙を父親に書いている。一八三〇年代に、サウス・カロライナの「無効宣言」を主張する父のもとで、彼女は南部州権論の問題に関心をもち、自然と、南部人の立場から国の政治を見る様になった。

メアリーは、少女時代、カムデンの私立学校に通い、一八三五年、両親がミシシッピ州の綿花農園に引きこもった後は、チャールストンの寄宿学校に送られた。そこは上流階級の優雅な南部女性養成所で、フランス語、ドイツ語を教え、広く文学、歴史の知識を修めさせて、社交界へ、いわゆる「美しき南部の貴婦人」を送り出す所である。しかし、メアリーは一三歳の時に、すでにサウス・カロライナの富裕な大農園主の一人息子、ジェームズ・チェスナットと恋に陥り、厳しい監視の下で寄宿生活の中で、四年間愛読書や手紙の交換を続けた。そして一八四〇年、一七歳のメアリーはその恋を成就した。

ジェームズ・チェスナットはプリンストン大学卒業後十年間は、弁護士を開業していた。彼の家は約一〇〇〇人の奴隷を所有する大農園で、当時の多くの南部大農園主と同じ様に、ジェームズも政界に出ていった。彼はまず州議会議員から始め、一八五八年連邦下院議員としてワシントン

に滞在した。そこで、チェスナット夫妻は各地からの政府高官の人々と、派手な、そして知的な交遊を持った。ジェームズは強い州権論者で、リンカーン大統領当選と同時に、連邦から身を引き、サウス・カロライナの連邦分離の旗頭の一人となった。

一八六一年二月、チェスナット夫妻はアラバマ州セントゴメリーに移り、南部連合政府樹立の諸計画に参加した。戦争勃発当時、ジェームズ・チェスナットは南部連合政府からの使者の一人として、サムター要塞で、北側のロバート・アンダーソン陸軍少佐に降伏を要請した。その後、彼は南部連合議員を務めながら、ジェファソン・デイヴィス大統領の補佐役となり、戦争末期には、陸軍代将として活躍した。

チェスナット夫人は彼女が三八歳の一八六〇年一月から、一八六五年八月まで日記をつけた。その日その日にあった出来事や、彼女の感想を簡単なメモ形式で、戦時中の粗末な紙に書き残した。そして、戦後それらのメモを基にしてチェスナット夫人は日記を書き直した。それはノート約四八冊、四〇万語にも及ぶものであった。彼女はそれを出版するつもりだったが実現しないうちにこの世を去った。そこで彼女は、友人のイザベラ・マーチンにそれを託した。マーチンは、それを編集経験の多いマルタ・ロケット

・アバリーと共に、一五万語位の長さに編集し直し、一九〇五年出版した。⁽¹⁰⁾この版は、まだ生存している日記の中の登場人物にさしざわりのある事や、編集者自身ふれたくない奴隷制や、南部社会に関する事を除いている。一九四九年、チェスナット夫人の日記は、再び、ベン・エイムズ・ウィリアムズの手によって、現代の読者にも読みやすい様に編集され、出版された。⁽¹¹⁾この版は歴史的視野にたつて、前後の文脈に関連のない手紙や、チェスナット夫人の読書から引用された詩等を省いて、原文よりもやや短かいが、かなり包括的に、しかも、マーチン・アバリー版の様に個人的偏見をはさまずに編集されている。筆者はこの小論の中で、マーチン・アバリー版を参考にしながらも、ウィリアムズ版を基にした。

では、何故チェスナット夫人は、戦争中に日記を書き始めたのか。彼女は日記の中で、この問に答えている。「私は気晴らしに毎日書いている。この日記が将来、この時代の真実を伝え、私よりも、もっと重要な人々の役に立つてくれればよいと思う。」⁽¹²⁾チェスナット夫人は、南部にとって戦況が悪くなればなる程、日記を書く事によって慰められた。詩のリズムを考え、言葉を探して日記を書いていけば、一時的にしても、彼女は悲しみや、苦しみを忘れる事が出来た。

チェスナット夫人は日記に、彼女が耳にした事、見た事、知った事等あらゆる事を、彼女の思うままに書いた。うわさ、ゴシップ、冗談、戦争の逸話、友人達の恋愛事件、知人の死等、内容は豊富である。彼女はさらに、南部社会の政治、経済、軍事力を鋭い目で観察し、軍人、政治家、黒人、スパイ、捕虜について言及した。夫が政府高官だったので、夫と共にかなり頻りに各地を訪れる機会を得た。チャールストン、モントゴメリー、リッチモンド、コロンビア等の大都会はもちろんの事だが、時には戦場にまで同行した。夫の留守中には、サウス・カロライナのチェスナット家の大農園や、アラバマの農場で過ごした。だから、南北戦争以前の生涯生れた地方から離れた事もなく、家庭内に縛られた多くの南部女性には望めない行動範囲が、戦争のおかげで、彼女には与えられた。これは、場所的な変化によるものばかりでなかった。彼女の場合には、男性も含めて多くの人々と知り合う機会が、戦争によってふえた。南部連合の指導者達と戦争について対等に討論したり、観劇に出かけたり、毎日活気のある生活をした。この恵まれた条件のもとで、彼女の視野は広がり、日記の内容はますます豊かになっている。彼女の日記には、当時の女性としてはめずらしい程の鋭い観察力と分析力でもって、彼女自身の意見が述べられている。彼女程、南北

戦争を、南部人の立場で内側から覗けた人物は、デイヴィス大統領夫人を除いてはいなかっただろう。⁽¹³⁾チェスナット夫人の日記は、彼女自身が予想した様に、後世の人々にとって貴重な資料となっている。

(3) 戦争中のチェスナット夫人

南北戦争以前のチェスナット夫人の生活は、一八五八年から二年間の首都ワシントンでの連邦下院議員夫人としての社交生活を除いては、故郷サウス・カロライナでの静かな日々だった。もし戦争がなければ、彼女はその平穏な生活の中で日記をつけたいとの衝動も感ぜずに、すなわち、物事を深く考え、分析する事もなく過ごしただろう。それでは、チェスナット夫人は戦争中どんな生活を送って、その生活は彼女の独立した人間としての自覚とどう結びついたのだろうか。

一八六〇年、ジェームズ・チェスナットが南部連合政府に加わると同時に、チェスナット夫人も、デイヴィス大統領夫人を中心とする南部社交界の人気者になっていった。彼女の深い教養と、明かるい性格と、機知に富んだおしゃべりは、多くの人々を彼女の家に引き寄せ、また、彼女はどこへ行っても歓迎された。彼女と同じく社交界の花形の

クレメント・C・クレイ夫人の回想録の中で、チェスナット夫人は、「外国語が堪能で、首府の教養ある御婦人達の中でも高く評価されていた。さらに、彼女は、パリのお店の品をごっそりと入れ、常にエレガントな着こなしをしていた。だから、彼女のまわりで流行を追う人々は、好奇心から競いあって、彼女のファッションを盗みとっていた。」と書いている。

チェスナット夫人は戦争初期の頃、この社交界での華やかな生活を十分に楽しんでいた様である。この派手な社交生活は、戦争という異常な状況だからこそ生まれたものである。日記の中でも、たびたび、この時期は戦争中にもかかわらず、一生のうちで一番活気に満ちた充実した日々で楽しいとの感想を、彼女は述べている。毎日、パーティーや会食や観劇で、多くの人々と接し、会話を楽しむ事が彼女にとって最大の喜びだった。夫以外の多くの男性に交って、あらゆる問題を討論し、自分の意見を述べる事が出来た。独立した一人の人間としての自覚を持って、生活する事が出来る様になった。一見、戦争中のこの華やかさは、彼女の愛国心と矛盾する様であるが、これは南部人の屈折した心理をよく表わしている。彼女自身も、この点に関して自己分析している。戦争に勝つ希望が薄れてくればくる程、彼女らをとり巻く雰囲気は、絶望、死、恐れ、悲しみ

だった。だから、少しでも意気高揚のために、自分を慰め、陽気に過ごした方が、これから戦場に行く軍人のためになった。だから、つかの間の気晴らしを求めて、最大限に楽しんだのだ。彼女の一八六四年一月一日の日記には、「悲しみや落胆は、少しも我々を助けてくれない。私達は十分に悲しみ過ぎてゐる。」と記されている。

チエスナット夫人の家庭は、戦争末期でも物質的に困る事はなかった。多くの南部人は農園が没収されたり、働き手を失ったり、また、ヨーロッパからの輸入が北部による海上封鎖によりストップしたりして、食料不足に悩んだが、彼女の場合には、夫の両親がカムデン付近で経営する農園のおかげで、豊富な食料、衣料を得た。⁽¹⁶⁾さらに、友人からの贈り物も加わって、チエスナット夫人の都会での食卓にもあらゆる物が並び、豪華なメニューで招待客をもてなした。

この様な派手なチエスナット夫人の日常生活を、ジェームズ・チエスナットはやや批判的に見た。陽気で、感受性豊かで、多くの友人と接しられる都会生活が好きで、浪費家の夫人の性格に比べ、ジェームズは冷静で、威厳に満ち、自制心が強く、じっくりと思考するのを好む性格だった。故に、妻に戦時中の度の過ぎる浮かれ陽気を戒める事がたびたびあった。これに対して、チエスナット夫人は夫

の注意を一時的には受け入れ、少し自重したが、夫の留守の時には、相変らずパーティーを開き、自分の思うままの生活を送った。

チエスナット夫人はその性格から、夫の家族といっしょの農園暮らしを好まず、義理の両親としっくりいってなかった様である。チエスナット家は、南部大農園主の典型で、家長を中心とする封建的家庭だった。そこではブライバシーがなく、特に女性の行動は縛られ、チエスナット夫人は、義理の両親から、女性として、何をすべきで、何をしてはいけないか等、細かく注意を受けていた。この様な生活は、自己主張の強いチエスナット夫人にとって、息のつまる思いで、一日も早く友人の待つ都会、リッチモンド、モントゴメリー、コロンビアに逃げ出す事を望んだ。また、チエスナット夫妻には子供がいなかったという点も、彼女の派手好みの性格を増長させ、彼女と夫の家族がうまくいかなかった一因かもしれない。だが、チエスナット夫人は、南北戦争以前の、夫に従順で家庭に縛られた南部女性と異なり、南部農園特有の封建的雰囲気になじめない新しい型の南部女性だという事は確かであろう。

チエスナット夫人は、南部社会での女性の経済的地位について、一八六二年二月の日記で言及している。彼女は、自分も含めて経済的に自立していない女性の弱さ、みじめ

さを嘆いている。いくら彼女が持参金を持って結婚しても、それは、すべて夫の所有物になってしまい、彼女は常に夫からお金をもらう立場に置かれた。彼女はこの女性の男性への従属を不服に感じ、女性は「こじぎの様に請うのでなく」自由自在に使えるお金を持つて誇りある生活をするべきだと主張している。このチエスナット夫人の様に、自我に目覚め、自分の好みをはっきりと主張し、自分の人生を楽しむでゆく、そんな女性が、法律的女性解放とは別に、この時代から育っていた事は注目し値する。

戦争中のチエスナット夫人の日常生活で、もう一つ重要な面は、南部連合のための奉仕活動である。彼女はやや病弱のため、彼女の階級の他の夫人に比べて、それほど頻繁には奉仕に参加出来なかった。しかし、兵士に激励の手紙を書いたり、カーテン、シーツから兵士のシャツや包帯を作ったり、靴下を編んだり、時には、病院に看護婦として働きに出たり、負傷兵においしい料理を作ったりした。さらに、南部連合の資金集めのために、慈善バザーや祭りを催した。南部女性がこれ程熱心に社会に貢献する事は、平和時には少ない。南北戦争前は、南部上流階級の婦人が外に出て働く事に、社会は強い偏見を持っていた。しかし、チエスナット夫人が愛国心から外へ飛び出した様に、多くの南部女性は、夫や恋人に会いたいため、あるいは、経済

的理由のために、彼女らに対する強い偏見にもめげず、外での活躍を始めた。

(4) 南部連合の鋭い観察者

チエスナット夫人は前述の様な日々を送りながら、彼女ら女性も参加して南部のために戦っているという意識を強めていった。彼女の小さい頃からの政治への関心は、この戦争をきっかけにして、はっきりと表面化した。彼女は女性性としてはめずらしく、南北両方の幾つかの新聞を読み、戦況から、外交問題までかなり詳しい情報を得ていた。彼女の鋭い分析は、これら新聞や、知人から得た情報を基にしている。

一八六一年初め、南部諸州の連邦分離が現実問題となった時も、彼女は冷静に周囲を見廻して、南部の立場を考えた。他の多くの女性は何もわからぬまま、大砲の音、軍人の行進、サマター要塞陥落の興奮に酔い、連邦分離支持の気炎をあげた。しかし、一般の女性より鋭い洞察力があったチエスナット夫人は、「合衆国という大国から離れる恐ろしさ」を感じ、南部のこれからの生き方に不安を抱いた。⁽¹⁸⁾

しかし、小さい時から養われた彼女の州を愛する気持から、チエスナット夫人は連邦分離支持に傾いていった。南

部連合は、南部の権利を守るために戦っているものであって、その南部には正義があると信じている彼女には、北部人によつて自分達の土地が征服され、敵側の支配下になる事は耐えられない事だった。一八六一年六月、彼女の日記は、「ヤンキーが私達を殺すかもしれない。そして私達の土地を荒廃させるかもしれない。でも、私達を征服するんですって！ そんな事は決してさせない」と強い言葉で書かれている。

チェスナット夫人が考えるには、「感情的に憎しみあっている南北が、お互いに傷つけあつて、一つの国としているよりも、南部が平和的に連邦から分離した方が、双方のためだ。だから、北部は、南部の事に干渉せず、南部が独立するのを黙認して欲しい。どうして血まで流して、南部を引っぱつておきたいのだろう。ただ私達を一人にして欲しい。それだけだ。」という様に、戦争は全く不要で、彼女は、その責任を北部のみに課している。

北部はチェスナット夫人にとって、徐々に、憎しみの対象となつた。彼女は、敵方の資金、軍需品、兵力を南部連合のそれらと比較し、その戦力の差の大きさを嘆いている。そして、力にものを言わせて、はじめは「連邦維持」、そして、一八六三年一月以後は、それに加えて、「奴隷解放の戦争」との大義名分を内外に宣伝しながら、南部に侵入

する北部に厳しい言葉を投げつけている。「私達はあらゆる辛辣な言葉を、敵のためにとっておいている。私達は率直に意見を述べる異教徒だ。私達は敵を憎み、友を愛している。……計りしれないやり方で、あらゆる北部人は、この戦争で莫大な金をもうけている。……この戦争は彼らにとって単なる愉快な興奮でしかない。」

こういう南部人としての立場は、彼女の日記全体に貫かれていた。戦争初期には、彼女はこの戦争はすぐ南部の勝利に終るだろうとの楽観的予測をした。彼女は南部人の勇氣、忍耐、精神力の強さを信じていたからである。彼女は国のために軍隊に入る人々を高く評価し、勇敢で善良な人々は皆軍隊にいと断言している。だから、彼女は男性でありながら、自分の財産ばかり守って、家にとどまっている南部人に腹をたてた。とりわけ、自らは戦場に行かず、口先だけで他の指導者の戦術のまずさを批評し、国の利益よりも、自分達の個人的名譽ばかり追求して政治家をチェスナット夫人は許す事が出来なかった。彼女はこれらの人々に、「首をつつて死ねばよい。」との激しい怒りの言葉を投げつけている。彼女の愛国心と結びついた戦闘軍人賛歌は、ついに「もし私が男だったら、戦場に行けるのに。」と、口惜しがって日記に書く程に高まっている。

チェスナット夫人の南部を愛する気持は、当然の事なが

ら、その象徴ともいえる大統領ジェファソン・デイヴィスへの尊敬の念と結びついた。デイヴィス大統領は、初期から南部連合内部で不人気で、南部各地の新聞は彼の事を痛烈に中傷した。デイヴィス大統領は気づかしい性格で、他人とうまくやっていく事が下手だった。特にジョセフ・E・ジョンストン將軍との不仲は有名で、將軍が期待したような昇進を与えなかったので、大統領はジョンストンからひどく憎まれた。P・G・T・ポールガード、ロバート・ツーム、バーンウェル・レット、ヘンリー・フット等南部連合の有名な將軍、政治家は、たびたびデイヴィス大統領本人や、彼の政策を批判した。この内部分裂は戦争が進むにつれて激しくなり、これを敗戦の理由の一つとしてあげる歴史家も多い。チェスナット夫人はこれら政府要人の仲違いを克明に記録し、その都度、デイヴィス大統領を弁護していた。彼女は、彼こそ南部を救ってくれる唯一の人と信じていた。だから、種々の大統領への批判に心を傷め、彼女の家では、デイヴィス攻撃は御法度となつた。チェスナット夫人の描くデイヴィス像は、親切で、心暖かく、南部の事を心から思う偉大な大統領で、彼女の尊敬するジョン・C・カルフーンの弟子とみなした。チェスナット夫人のデイヴィス大統領夫人評価も、大統領に対する評価に劣らず高い。パリーナ・ハウエル・デイヴィスは、ウィットに富

み、彼女の周りの人々にやさしく、一緒にいるのが楽しい賢夫人だと称賛している。この二人は頻繁に行き来をし、交友を楽しんだ。

チェスナット夫人の他の南部連合指導者に対する評価は、すべて彼女の愛国心が基準となつて決定される。つまり、彼女は南部のために良く働き、勝利へ導いてくれる人々をほめたたえ、有能でない政治家や、仲間同志けんかばかりして、南部の事など眼中にない人々の事を彼女はけなした。ロバート・E・リー將軍は、前者に属する代表だった。戦前、チェスナット夫人は、リー將軍に会った事がなかったが、一八六一年七月、初めてリッチモンドで彼の乗馬姿を見て、その尊厳さに強くうたれ、その後は彼の業績を称え、「冷静で偉大な素晴らしい軍人で、世界の第一人者」との評価を下している。リー將軍の息子や娘達が、父親に劣らず南部のために奉仕している姿をも、チェスナット夫人は称賛の念をもって記録している。

デイヴィス大統領、リー將軍に続いて、チェスナット夫人のお気に入り、ストーン・ウォール・ジャクソン將軍だ。彼の戦場での敏速な戦略に感嘆し、まさに南部が欲していた人物その者と表現している。だから、ジャクソン將軍が、一八六三年五月二日、ヴァージニア州チャンセロービルの戦場で、南部連合軍の兵士によって誤つて撃たれた

時、チエスナット夫人の嘆きは大きかった。そして「もし、彼が生き返って私達の所に来てくれたら……もう一年長生きしてくれたら、きっと彼は南部を救ってくれただろう。」と、戦争末期になっても、彼の事を思い出して書いている。

チエスナット夫人は、その他、サウス・カロライナの指導者ウェード・ハンプトンの息子プレストンがコロンビアの戦いで負傷し、父親の腕の中で息をひきとった劇的な場面を記録し、その悲しみにもめげず、職務に戻ってゆくウェード・ハンプトンの人並みならぬ勇敢さを称えている。そして彼が陸軍中將になった一八六五年二月、その昇進は彼の功績を考えるとあまりにも遅すぎると憤慨している。

以上のような人々に比べて、チエスナット夫人は、ジョセフ・E・ジョンストンに対しては好意的意見を持つていない。彼の勇敢さは高く買っているが、神経過敏で攻撃性に乏しく、前述のようにデイヴィス大統領と仲が悪かったので、チエスナット夫人は彼を嫌っていた。

チエスナット夫人の他の南部連合指導者へのウィットに富み、ピリッとした皮肉に満ちた論評は、日記の随所にみられる。たとえば、ジェームズ・ロングストリート將軍について、「戦い出すとブルドッグのようだが、老ビーターはいつも行動が遅すぎる。」南部連合からイギリスへ、その

承認と援助を求めに行った使者のジェームズ・メイスンとウィリアム・ヤンシーについては、彼らの外交的手腕のなさを、副大統領アレキサンダー・ステイブンスについては、南部連合のために真剣になってないと批評している。

チエスナット夫人の批評の対象は、南部人に限られてない。北部の指導者についても彼女はふれている。リンカーン大統領の卑俗さ、金銭的にけちな性格は彼女ら南部上流階級夫人の話の種だった。しかし、彼の暗殺には驚きを示し、それは南部に悪い影響をもたらすだろうと推測し、それ以後、リンカーン批判は姿を消し、攻撃は「酔いどれで血なまぐさい事の好きな洋服屋(出身の)」「アンドルー・ジョンソン大統領に向けられた。

北部人の中で一番チエスナット夫人が嫌っていた人物は、シャーマン將軍である。彼を形容する言葉には、「冷酷、無慈悲なやつ、夢魔、餓鬼、ハイエナ」と彼女の憎しみが率直に表現されている。

以上のように、チエスナット夫人は数多くの南部連合指導者と接触して、冷静な目で内部事情を観察している。彼女は、彼らが個人攻撃を繰り返しながら内輪もめばかりしている事を指摘し、これが南部連合の弱みである事を見抜いていた。彼女は愛国心から、南部のためにならない事は誰に憚る事なく日記に書いた。戦争中、執筆中の日記を居間

のテーブルに広げて、誰にでも公開し、また、戦後、これを出版しようとした意気込みは、彼女の自己主張の現れである。時には女性特有の感情的表現が使われているが、彼女の価値観に基づく人物評価や正確な戦況判断は、他の多くの女性による日記の及ばぬ所である。これだけの事を言い切れる人は、当時の南部で男性においてすら数少なかったであろう。チエスナット夫人は娘時代から文学的才能があったにせよ、戦争に遭遇してはじめて、彼女の洞察力は研ぎすまされ、彼女の内部では南部人としての認識がさらに強まったのだ。この事は、彼女が戦争によって一人の独立した南部女性として生き始めたということである。

(5) 奴隷制反対論者

チエスナット夫人の日記の中で、彼女が南部女性として真剣に考え、何回も繰り返してとり上げる話題の一つに、奴隷制の問題がある。奴隷制そのものについて述べる前に、チエスナット夫人の黒人観にまずふれてみよう。彼女は典型的な南部白人の偏見に満ちた黒人観を持っていた。つまり、黒人は一般的に、無責任で信頼出来ず、不潔で、怠け者であり、白人よりも劣る人種だとの見方である。日記の中でかなりどぎつい表現で、黒人を軽蔑している。

例えば、一八六一年十月四日付で、「(黒人の)心は、彼らの肌の色と同じように暗く、啓蒙されてない。」とか、同年十一月二十五日には、「結局のところ、黒人の小屋は、あらゆる年代の、あらゆる大きさの、そして男女老若に寝起きしてる小屋だ。」とか、さらにひどく、一八六四年八月二十九日、「これらの半アフリカ土人をもとのような裸で野蛮な動物のような状態に戻すのに、ほんの一カ月しかからない。」等のような言葉が記されている。

このような黒人観から、多くの南部人は奴隷制は黒人にとつて必要なもの、つまり、黒人を養育し、教育し、立派なキリスト教徒として啓蒙するために、奴隷制は不可決だとの奴隷制擁護論を持ち出すわけだが、チエスナット夫人は、この一般論からはずれている。彼女は奴隷制を悪と見なしていた。彼女は奴隷制を憎んでいた。この点では、北部中心のアポリッショニストと同じ立場だった。しかし、チエスナット夫人はアポリッショニスト達を批判している。彼女によると、北部人達は黒人をアフリカから連れて来て売買し、多額の利益をあげ、それから徐々に南部にその面倒を肩代りさせた。だからストウ夫人の『アンクル・トムの小屋』は奴隷制の本質を見誤り、表面的にしか扱っていないと、チエスナット夫人は批評するのである。

チエスナット夫人が奴隷制を嫌っている理由は、全く南

部白人の自己中心的考え方によるものである。まず第一の、そして最大の理由は、南部男性と黒人女性の関係である。彼女が主張することは、奴隷制度のもとに黒人女性が存在する限り、白人の健全な家庭は破壊され、混血児が続出する点である。彼女の一八六一年三月十四日の日記には、典型的南部奴隷所有者の家庭像が描かれている。

奴隷制のもとでは、私達は売春婦達にとり囲まれて生活している。……昔の家長のように、私達南部の男性は一つの屋根の下に、妻と妾と一諸に住んでいる。そして、どの家庭にもいる混血児達は、その家の白人の子供達と部分的に似ている。そして、その混血児達の父親が誰であるか、その家の主婦を除いて、誰でもすぐ言い当てることができるのだ。⁽³²⁾

チェスナット夫人は、南部男性が特に不道德だと述べているのではない。この妻と妾の同居に代表される南部特有の古い家族関係に、反発を感じているのだ。一般的に、南部白人女性は、黒人奴隷制度が存在するため、表面的には、騎士道精神から崇められていた。だが、実質的には、白人男性によって支配されていた。このような南部社会構造の根源が奴隷制度の中にあることを、チェスナット夫人

は見抜いていたのかもしれない。

チェスナット夫人は奴隷制を憎む原因として、前述の独立した南部の白人女性としての人間的分析の他に、奴隷制度の経済性を指摘している。奴隷制は南部人にとって経済的利益を与えてくれるどころか、損失になっている点である。チェスナット夫人は黒人を世話するのにかかる費用と農園からの収益を比較し、黒人奴隷は、南部白人にとって重荷であると主張している。特に、黒人を世話する白人の主婦は、仕事が多く忙し過ぎるので、彼女は、必要な人数だけ賃金労働者として、黒人を雇った方が白人にとっては経済的だし、黒人にとっても、より望ましい状態であると提案している。

奴隷制のもとの黒人の暴力も、チェスナット夫人の奴隷制反対の理由の一つである。彼女の従姉妹が彼女の家で養って黒人に殺された事件はチェスナット夫人にとって、かなりのショックだった。彼女が見聞きする黒人奴隷の白人に対する反抗的態度、暴力は、白人婦人にとって恐怖だった。南部社会と暴力の深い結びつきを述べるチェスナット夫人は、陰悪な黒人と白人の関係を奴隷制度から生ずるものと判断し、それ故、奴隷制を嫌った。

ところでチェスナット夫人は、黒人を白人に劣る人間として卑しむ一方、彼女の身近な黒人に対しては、非常に異

なった態度を示していることに注意したい。彼女は常に四

五人の家の内奴隷と共に行動した。日記に描かれているチェスナット夫人とこれら黒人奴隷の姿は、いわゆる大農園主特有の温情主義に基づく相互信頼である。チェスナット家では、かなり自由な生活を、黒人達に与えていたらしい。黒人達が自分達の集りを開いて、楽しく歌い、踊り、語り合う光景が描かれ、また、チェスナット夫人は雑多な家事労働から解放してくれる彼女のお気に入りの家の内奴隷の娘に、心から感謝の言葉を述べている。チェスナット家では、黒人奴隷を心から信頼し、時には、金銀の食器、宝石類を彼らに預けて留守にした。また、ある時には、ジェームズ・チェスナット代将の給料六〇〇ドルをとりに行かせた。この主人側の信頼に答えて、黒人達は、主人に忠実で、しかもそれ以上に、困っている時は、自ら進んで助けようとした。たとえば、チェスナット夫人が、モントゴメリーからアラバマのポートランドにむかう途中の宿屋で、酔払いにからまれた時、彼女の家の内奴隷は、相手を投げ倒す勢いで夫人を守った。

この心やさしい主人と、忠実な黒人達の関係は、チェスナット家では、一八六三年の奴隷解放宣言が出された後も続いた。他の多くの黒人達は主人を捨て、北軍の兵士について行ったりしたが、チェスナット家では、一人も逃亡し

た奴隷はいなかった。一八六四年、シャーマン将軍が焼土作戦で、サウス・カロライナに近づいて来た時も、チェスナット家の奴隷達はいつもと変わらぬ態度で働き続けた。そして彼らは「死ぬまで(チェスナット家への)忠誠を誓った」⁽³³⁾南部連合が敗れて、奴隷制が実質的に崩壊した後、チェスナット家の奴隷達は、以前と同じように農園に残ることを希望し、チェスナット夫人も、事情の許す限り彼らの面倒を見た。

このようにチェスナット夫人の奴隷制反対論者としての分析は、南北戦争の南部側の大義名分である奴隷制擁護とは矛盾するが、南部白人女性としての人間的自覚、より健全な南部社会の建設という点では、彼女の首尾一貫した理論である。この奴隷制に関する部分は、日記の原本が紛失していて、戦後書き直された部分なので、より冷静に奴隷制を分析していると言えるだろう。ただ、このように日記の各所で奴隷制にふれ、奴隷制を憎みながらも、彼女個人として、黒人との心温まるエピソードを列挙してるチェスナット夫人は、南部人としての罪の意識を強く感じていたのだろう。

(6) おわりに

チエスナット夫人の日記は、戦争末期に近づくにつれて、最初の頃のような華やかな活気に満ちた記録から、悲惨な、絶望の毎日の記述に変化している。彼女の語ることは、夫や息子や恋人を失った人々の悲しみ、南部の町、村が北軍に侵入される恐ろしさが大部分を占めるようになった。一八六三年夏のゲティスバーグの戦い、ヴィックスバーグの占領は彼女を大いに落胆させた。そして、一八六四年後半には、チエスナット夫人は、ほぼ南部連合の敗北を予測していた。そして、同年九月二日のアトランタ陥落で、すっかり望みを失った。彼女は「終りが来た。紛れもない事実だ。」と決然と書いていた。

南部を愛する彼女にとって、敗北はつらいことだった。彼女の痛々しい程の心情は、日記によく表現されている。一八六五年二月の「恥、不名誉、赤貧、すべてが一度に耐えるのがつらい。大敗北……。私は頭をたれて、声をあげてすすり泣いた。」の内容のように、彼女は絶えず泣き続ける自分を描いている。実際に彼女の前途にあるものは、借金と夫の投獄だけだった。南部連合の紙幣、銀行債、鉄道債は何の価値もなくなり、単に土地と家が残された。このような苦しみ、悲しみの中で、チエスナット夫人は、もう日記を書き続けることができなくなった。書くことがないから日記をつけないのではなく、彼女の見たたり、聞いたり

することが、あまりにも胸を痛めることが多いからだ。そして、彼女の日記の最後は、一八六五年八月二日、「十分だ。もうこれ以上書かない。」という言葉で結ばれている。

以上のように日記は終わっているが、チエスナット夫妻はその後、カムデン近くの農園に引き込み、農園再建に励んだ。チエスナット夫人のその後の生活は、記録がほとんどないので、詳細にはわからない。ただ、彼女は従来からあまり身体も丈夫でなかった上に、南部連合の敗北で、強い精神的打撃を受けたので、一八六〇年代後半は意気消沈のうちに過ごした。時々、暑い南部の夏を避け、ヴァージニアやニューヨークの温泉地に出かけることもあった。

しかし、次第に一八七〇年代になると、ジェームズ・チエスナットもカムデン地方で、再び有力者としての地位を確保し始め、サウス・カロライナ州の黒人取締り法制定反対者として活躍した。チエスナット夫人も、徐々に体力と気力を回復した。一八七三年、彼らはカムデン近くのサースフィールドに田舎風の落ち着いた邸宅を建てた。そこで彼女はジェフ・フアン・デイヴィス元大統領釈放願書を書いたり、その地方の人々のためのブッククラブを組織したり、戦争中の日記の整理等をして、静かな日々を送った。一八八四年のジェームズの死を追うようにして、翌年、メアリ・チエスナットもなくなった。そして遺言により、サー

スフィールドの夫の墓の側に埋められた。

チエスナット夫人の人生を振り返ってみると、彼女の最も活気に満ち、そして充実した部分は、南北戦争の期間中だったと言える。もし戦争がなければ、彼女は南部大農園の妻、政治家の妻として、ごくありふれた平穏な生活を送ったであろう。事実、戦争末期、彼女は悲しみ、恐怖、絶望、屈辱からのがれて、彼女の好きな文学作品を読みながら平和に暮らす日々を夢見ていた。しかし、現実には、戦争という大きな社会変化の波にのまれて激動の日々を過ごし、その四年間、他では得られない体験を彼女は得た。彼女の社会を見つめる目は大きく見開かれ、持つて生まれた知性によって、彼女はまわりの出来事や人々を鋭く観察し、冷静な分析力で評価を下し、自由に自分の考えを展開し、それを誰に遠慮することもなく記録にとどめた。この過程で、彼女は自分を独立した一人の人間として自覚し、たびたび夫とは異なる意見を述べ、自分の好きなように生活することを要求した。

しかし、このようにチエスナット夫人が彼女自身の時間を持ち、それを読書に、社交に、奉仕にと、好きなように使えたのは、彼女には経済的余裕があり、しかも、何人かの家内奴隷が常に彼女の身のまわりの雑務をしてくれたためである。彼女は奴隷制を心から憎み、その廃止を望んで

いたが、その反面、彼女の精神的自立は、その奴隷制のものと家内奴隷が存在したからこそ得られたものであるとは気づいていなかったようである。

さらに、彼女が戦争中に徐々に自覚した一人の独立した女性としての意識は、日記にとどめる程度で、ごく個人的意見として残っているにすぎない。他の同じように目覚めた南部女性と手を結び、その自覚を女性の権利と結びつけて具体的な運動に発展させようとの考えは、彼女には微塵もなかった。チエスナット夫人の時代には、法律的には、女性の地位は少しも向上しなかった。このように、現代の我々の目から見ると、チエスナット夫人の独立した女性としての自覚は、種々の条件づきで、しかも、形の上では何の変化も女性の地位向上にもたらさなかったごく内在的なものである。

チエスナット夫人のこの限界は、南北戦争前の南部女性の地位を考えてみると、当然の結果のように思われる。戦前、南部女性には特に一人の独立した人間としての自覚が乏しかった。他の地域での女性解放運動は、奴隷制反対運動と深い関連があったので、南部女性はその組織に加わらなかった。だから、エリザベス・ケイディー・スタントンとルクレチア・モットが中心となって、一八四八年セネカ・フォールズで開かれた「第一回女性の権利を守る会」

が、一八六一年まで毎年、北部、西部の各地で開催されているのに、南部では一度も開かれなかった。北部女性運動家が掲げる、女性の財産権の確立、離婚に関する女性の権利、婦人参政権等の要求事項は、南北戦争まで南部女性にとって無縁のものであった。このように北部女性よりも、独立した女性としての意識の点で、遅れをとっていた南部女性の中であって、チェスナット夫人が、たとえ条件つきでも、しかも、ごく個人的なものであっても、戦争によって自由を得て、それを十分に楽しみ、しかも、女性の地位、南部社会等の問題について彼女自身の意見を公に記録したということは、南部女性の解放の歴史の中で、大いに高く評価してもよいことであろう。

チェスナット夫人に限らず、多くの南部女性には、戦争を契機にして精神的解放を自覚し、中には実際に行動に移し、職業婦人になった女性も何人かいる。従軍看護婦となったケイト・カミング、フィビー・ペンバーや、南部連合政府のオフィスガールとしてはじめて採用されたジェディス・マクギール等は、職業婦人に対する世間の強い偏見にもかかわらず、立派に彼女らの職務を遂行した。このように南部女性が、必要上から外で働き出したり、家庭内でも一人前の人間として生活し始めたことは、彼女らにとって画期的なことだった。男性に頼りきりの生活から、自らの足

で立派に立ち上ることを学んだ南部女性は、一人の人間として生きる自信をえたのだった。

戦後、この独立した人間としての意識に目覚めた南部女性は、決して、人間解放の道を後戻りすることはない。チェスナット夫人の場合は、病弱のため静かな田舎暮らしに入ったが、戦争中の記録に力を入れ、それを後世の人々に伝えようと試みた。多くの職業婦人達は、必死で職を固守しようとした。また高等教育を受けるために、新設された大学に行く南部女性もかなりいた。徐々に、婦人解放運動に参加し始め、禁酒運動、その他種々の改革運動、婦人参政権運動で活躍し始めた南部女性もいる。すべて、これら南部女性の立ち上りは、南北戦争がきっかけとなっている。この点で、チェスナット夫人の日記は、南部女性の戦争中の精神的解放の証言として、貴重な記録である。

[注] (1) 南北戦争前のアメリカ女性についての研究は、Eleanor Flexner, *Century of Struggle: The Woman's Rights Movement in the United States* (Cambridge, 1959) pp. 3—23; Andrew Sinclair, *The Emancipation of the American Women* (New York, 1965) pp. 3—21, 特に南部女性については Ann Firor Scott, *The Southern Lady: From Pedestal to Politics 1830—1930* (Chicago, 1970); Julia Cherry Spr-

will, *Women's Life and Work in the Southern*

Colonies (New York, 1938, 1966, 1972); William R. Taylor, *Cavalier and Yankee* (New York, 1963)

pp. 115—122, 144—176 など参照。

(2) 南部人の英雄として Kate Stone, *Brokenburn: The Journal of Kate Stone: 1861—1869* ed. by

John Anderson (Baton Rouge, 1955); Sarah L. Wadley's *Diary* (Microfilm Copy in Emory Library of original in Southern Historical Collection of the University of North Carolina Library).

(3) 戦争中の南部農園経営については Francis B. Simkins and James Welch Patton, *The Women of the Confederacy* (New York, 1936) pp. 111—116 参照。

(4) Mary Elizabeth Massey, *Bonnet Brigades* (New York, 1966) p. 175.

(5) ショージア州アトランタの有名な南部の大都市では、"Civil War Round Table" と呼ばれる南北戦争同好会が、月一回定期会合を開き、各家庭に埋もれた資料発掘、先祖をしのぶ茶話会、専門家を招いた講演会、戦場めぐり等を催している。

(6) チェスナット夫人の経歴については Margaret P. Child, "Chesnut" in Edward T. James, Janet Wilson and Paul S. Boyer eds., *Notable American Women: A Biographical Dictionary* (Cambridge, 1971), Vol. 1, pp. 327—330 を参照。

(7) Bell I. Wiley, *Confederate Women* (Westport, 19

75) p. 7.

(8) ショーミズ・チェスナットの戦争中の活躍については Merton Coulter, *The Confederate States of America* (Baton Rouge, 1950), J. G. Randall and David Donald, *The Divided Union* (Boston, 1961) を参照。

(9) 戦争中に書いたものは、それよりも長かったらしくが、原本はすべて一部を除いて書き直しが終ると同時に捨てられ、現在残っていない。チェスナット夫人の手書きの書き直し原稿はサウス・カロライナ大学・サウス・カロライナ図書館にある。

(10) Mary Boykin Chesnut, *A Diary from Dixie* eds. by Isabella Martin and Myrta Loechee Avery (New York, 1905).

(11) Chesnut, *A Diary from Dixie* ed. by Ben Ames Williams (Boston, 1949). (注) この本は Chesnut, *A Diary* と略す。

(12) *Ibid.*, p. 196.

(13) リナ・ンウォール・デイヴィスも戦後 Jefferson Davis: *Ex-President of the Confederate States* (2 vols., New York, 1890) という回想録を出版しているが、これはデイヴィス大統領弁護の内容で、彼についての記述が中心となっている。

(14) Virginia Tunstall Clay, *A Bell of the Fifties: Memoirs of Mrs. Clay, of Alabama, Covering Social and Political Life in Washington* ed. by Ada Sterling

- (New York, 1904) p. 50.
- (15) Chesnut, *A Diary*, p. 357.
- (16) 戦争中の南部家庭の経済的困窮については Massey *op. cit.*, pp. 197—220; Randall and Donald, *op. cit.*, pp. 262—264; Sinkins and Patton, *op. cit.*, pp. 138—264 等を参照。
- (17) Chesnut, *A Diary*, p. 186.
- (18) *Ibid.*, p. 3.
- (19) *Ibid.*, p. 73.
- (20) *Ibid.*, p. 114.
- (21) *Ibid.*, pp. 219, 456, 541.
- (22) *Ibid.*, p. 483.
- (23) *Ibid.*, p. 53.
- (24) ショーンマン・デイヴィスへの批判については Randall and Donald, *op. cit.*, p. 272; Bell I. Wiley, *The Road to Appomattox* (New York, 1956) pp. 16—42 などを参照。
- (25) 一八六一年はじめ、一時期チェスナット夫人とデイヴィス夫人は仲違いをしていたが、これはチェスナット夫人の戦争中執筆の原本には記されているが、出版するつもりで書き直された戦後の版では除かれている。チェスナット夫人とデイヴィス夫人の関係については Bell Wiley, *Confederate Women*, pp. 15—18 を参照。
- (26) Chesnut, *A Diary*, pp. 95, 155, 384.
- (27) *Ibid.*, pp. 336, 344.
- (28) *Ibid.*, p. 520.
- (29) *Ibid.*, p. 553, 539.
- (30) *Ibid.*, pp. 491, 493.
- (31) *Ibid.*, pp. 144, 162, 433.
- (32) *Ibid.*, p. 21.
- (33) *Ibid.*, p. 538.
- (34) *Ibid.*, p. 435.
- (35) *Ibid.*, p. 485.
- (36) *Ibid.*, p. 547.
- (37) 南北戦争後の女性解放運動史については Flexner, *op. cit.*, pp. 71—113 を参照。
- (38) この職業婦人は、それぞれ日記を残している。Kate Cumming, *The Journal of a Confederate War Nurse*, ed. by Richard Harwell (Baton Rouge, 1959); Phoebe Yates Pember, *A Southern Woman's Story* ed. by Bell Wiley (Jackson, 1859), 及び Judith Brokenbrough McGuire, *Diary of a Refugee* (New York, 1867).
- (39) 南北戦争後の南部女性の解放については Massey, *op. cit.*, pp. 339—369; Scott, *op. cit.*, pp. 105—134 等を参照。